

くうねあ

2019/9
No.1

安佐南区 東原 MAP



イラスト ©yui

**やっぱり
子どもは遊びの天才だ**

CONTENTS**まちの守り人 Moribito of town**

子どもたちが最初に触れる「社会」であろう小さなこの町で、積極的に子どもたちを見守ってくれる大人たちにお話を聞いてきました。

**保育士 鷹の爪 Nurse's claw nails**

くすの木保育園にもいろいろな特技やノウハウを持った保育士たちがいます。「能ある鷹は爪を隠す」。密かに隠し持った鷹の爪をご紹介します。

vol.1 アンガーマネジメント

**「センス・オブ・ワンダー」を忘れるな**

株式会社くうねあ代表／堀江宗巨

くすの木トピックス

ひと夏限定、サマースクール「学童保育 kusunoki」

f 認定こども園くすの木 / くすの木保育園 戸坂
ameblo.jp くすの木保育園～ホイクノハダザワリ～

<https://quonea.com/>



【安佐南区西原】
すくすく農園
藤本孝実さん

“ヒゲもじやのフジモトさん”と呼ばれていた藤本さんだが、園児から「あれ？」。撮影のこの日はさっぱりとしていた。(笑)



まちの守り人 Moribito of town

藤本さんの次男、小学3年生の孝明くんが3才の頃一年間通ったくすの木保育園。

その縁で今でも園児たちに、田んぼの泥んこ遊び、芋の植え付けや収穫などの体験ができるよう田畠の一部を開放してくれている。

この日藤本さんの農園に訪

れたのは年中（4歳児）の園児たち。トマトの収穫だ。

「これ変！ 黄色い！」とトマトの色や形にさえ面白さを見出し、トマトの葉についた小さな虫にも興味津々。

トマトの名前（品種）はアイコ。トマトを採るとアクが付く。藤本さんから見聞きす

る全てが子どもたちの貴重な体験になる。

藤本さんが大切にしているのは「縁」。

「子どもたちがここで生まれたのも縁です。一人で勝手に育つわけじゃないから知らないうちに周りの人たちが

あれこれと関わっています。どうせ同じ町にいるのなら、自分が知ってる事いろいろ教えてあげたいじゃないですか」と話す藤本さん。

それでも、率先して地域の子どもたちと触れ合っている大人は多くないと思う。

全てボランティアで長年園児たちを招き続ける理由を聞いてみると

「子どもたちの笑顔が好きだから。呼んでるんじゃなくて園児たちに来てもらってるんです。それで自分が若返るから」と破顔一笑。

アメリカの哲学者の名言、“楽しいから笑うんじゃない、笑うから楽しいのだ”を思い出した。ここでは子どもたちの笑顔が普通に溶け込んでいる。子どもにとっても、大人にとっても幸せな風景だ。

すくすく農園では野菜の直販も。お問い合わせはTEL082-874-0866

保 育 士 鷹 の 爪

Vol.1 アンガーマネジメント

“怒り”は、相手にわかるように、上手に表現するもの。



城山裕子さん

くすの木保育園保育士
アンガーマネジメント・キッズ・インストラクター

アンガーマネジメントとは？

インストラクターの資格を持つくすの木保育園の保育士、城山さんに聞いてみました。

「長い間、日本人は感情を表に出さないことが美德だと思われていました。だから感情を溜めがちになり出し方を知らない。怒り方がわからないから『うわっ！』ってキレイちゃう」

赤ちゃんの頃は『快』と『不快』しかなく、それが4～5才頃から徐々に色々な感情が言葉で表現出来るようになるの



で、思春期を迎える10才頃までがとても大切だと。

「子どもが大きな声を出してしまったら、うるさい！」と一喝するのではなく、『今、大きな声が出たね。何でだろう？』『何が嫌だったのかなあ？』と、大人の勝手な判断で原因を決めつけず本人の言葉で自分の感情を客観視させる。その習慣付けなのです」この客観視ができるようになることで城山さん自身も大きな変化を実感したらしい。

「怒りはきちんと相手に分かるように伝えるべきですが、

怒らなくて良いことは怒る必要はありません。イライラが溜まると、つい怒ってしまうので普段からイライラを溜めないようにすることもアンガーマネジメントの一つです」

プロテニスのフェデラー選手も取り入れた後に世界ランキング1位になったのだそう。ますますこのアンガーマネジメントを習得したくなかった。



親子アンガーマネジメント講習会
(2019/7/13)



会場／くすの木保育園東原分園
城山さん手作りの楽しい教材を使って、子どもたちが自分の表情を描いていく。



作／くすの木保育園 あゆかわ ゆきひと君 タイトル／「けっこんしてください いいですよ」

「センス・オブ・ワンダー」を忘れるな

「センス・オブ・ワンダー」の著者レイチェル・カーソンは『子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感をぶらせ、あるいはまったく失ってしまいます』と綴っています。

子ども達の日常は彼女が指

摘するように「驚きと感動」に満ち溢れています。

「みてみて～」「きてきて～」「ねえ、きいて～」と、言葉だけではなく、体全体を使って、驚きと感動を、そして世の中の素晴らしさを、我々に伝えてくれています。

この驚きと感動を我々大人も鈍らせないで共有して、子どもたちがいる豊かで暮らしやすい社会が実現できるよう

にという思いから、今回のタ

ブロイド判くうねあの出版となりました。

我々は「食う・寝る・遊ぶ」という基本的なことを大切にして、子どもたちと関わっています。その毎日は、子ども達のたくさんの言葉、たくさんの表情、たくさんの表現で溢れかえっています。それらはレイチェルが指摘するように「かつて我々大人も、たくさん持っていた」ということを思い出させてくれます。

大人にとって子どもたちの日常は、人生を完成させるための示唆に富んだ日常なのです。このことを地域全体で育んでいきたいと願っています。

子どもたちの驚きと感動に満ちた素晴らしい言葉、表情や表現を、そして、それを支える大人たちの活動を、この紙面を通じて少しでも感じていただければ幸いです。

株式会社くうねあ代表／堀江宗臣

◆レイチェル・カーソン (Rachel Louise Carson, 1907年 - 1964年)



アメリカの海洋生物学者で作家、1962年出版の「沈黙の春」ではDDTなどの化学物質の危険性を告白。この本によって世界は環境問題に眼を開かされた。病のために56歳で生涯を閉じるが、没後に出版された「センス・オブ・ワンダー」は、幼少時から自然の不思議さ・素晴らしさに触れるの大切さを説き、自然環境教育のバイブルとなる。

◆センス・オブ・ワンダー

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー=神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとのむででしょう。

「センス・オブ・ワンダー」、レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 新潮社刊より



出典・協力／レイチェル・カーソン日本協会

学童保育 kusunoki

子どもたちの遊びに、大人がわかる正解はない。

この日の参加児童は11人。集まった子どもたちに聞いてみると通っている小学校も学年も違う初対面の子ばかり。しばらくするとすぐに打ち解けて一緒にわいわいと好きな事を始め出した。

お気に入りの絵本の読書会、庭では蝉を追う探検隊、夏休みの宿題やピアニカを教わる子らも。誰の指示もなく



(上) のちに女子も加わる庭の探検隊。(下) ペイント大会のための水族館の下書き。

自然とやりたい事を見つけているように見えるのは何故なのか。

つぶく あやか
保育リーダーの津福 彩夏さんが教えてくれた。「普通、学童保育」というと何時から何時までは読書とか大まかな時間割を決めてみんなが同じ事をして1日が過ぎていきます。でもここで目指したのは子どもたちの主体性。私たちはヒントを出すだけです」

例えば2階の壁一面をキャンバスに見立てたペイント大会。普段は使っていない2階の白い壁を見つけた子どもたちの発案だ。最初は水族館にしたいと言っていたが、恐竜がいいとか、危険生物がいいとか議論白熱。最後にはみんな得意の絵を描くウォールアートとなった次第。これも2階を使っているよのヒントだけで子どもたちが話し合った取り組みだ。

正解も模範解答もない。あるのは「しぶとい対話」と、とにかくやってみるという「たくましい遊び」なのだ。

ひと夏限定、くすの木のサマースクール！

ゆめタウン祇園のすぐ隣、西原5丁目にある一戸建て（元おしゃれなカフェ）は大家さんの好意でお借りした、くすの木保育園の秘密基地。そこを夏休みの期間限定で小学生たちに解放して「学童保育 kusunoki」を開設しました。

[期間]
7/22～8/31
※日・祝・お盆休み
[対象]
小学1年生～6年生



あちこちの部屋に貼ってあった
男子主催の「昆虫大ずもう大会」の案内チラシ。
磁石遊びから発想したオリジナルの遊び。

「夏休み」は、たくましくなるためにあるのかも。

全て子どもたちが決めるわけではない。期間中6回あるクッキングイベントは事前準備のため日程が決められている。

取材の日は「ピザパーティー」だった。まずは段ボール箱でピザを焼く窯づくり。2つの段ボール箱の内側にアルミ箔を貼り上下にくっつける。

てきぱきと、みんなをまとめながら進めるのは、この夏、京都から引っ越してきたばかりの小学3年生の女の子。年下の子は飽きて別のことで遊びだが、ばらばらだった子どもたちが次第

に集まり窯づくりを完成させた。

途中保育士が「失敗してもいいんよ。またやればいいんだから」案外難しいアルミ箔の貼り付けを再チャレンジする男の子がいた。

あとは生地をこねて好物ばかりのトッピング。自分たちで作った窯で焼きあげたピザの味は格別だ。「どうぞ」と取材のカメラマンにもご馳走してくれた。

このサマースクールを終えたころ、ぐんとたくましくなった子どもたちがいるに違いない。

